

フランシスコ会日本管区 宣教基礎論



2015

フランシスコ会日本管区 宣教基礎論

Economy of Trinity & Fraternity in Mission

2015

目次

はじめに	5
1 現代世界における関係性の崩壊.....	6
2 三位一体と被造界のコムニオンへ	10
3 Fraternity in Mission	13
3.1 Fraternity において「より小さき者」であること	13
3.2 「より小さき者」であることによる宣教.....	15
3.3 Fraternity における聖霊の現存	16
3.4 現代世界における境界を越えていく Itinerant	19
4 三位一体と Fraternity	21
終わりに	24
参考文献 (本文中の引用には略号を用いる)	27
註	28

フランシスコ会日本管区宣教基礎論

Economy of Trinity & Fraternity in Mission

はじめに

アシジの聖フランシスコの言葉やフランシスコ会の会憲の中に明確に認められるように、フランシスカンのアイデンティティは **Fraternity** に求められる¹。 **Fraternity** は多義的な言葉である。それは共同体を意味する言葉であり、兄弟性もしくは兄弟的關係性を意味する言葉であり、後述する宇宙的兄弟性という文脈の中でも **Fraternity** という言葉は用いられる。 **Fraternity** はラテン語 **Fraternitas** の英語訳だが、日本語における適切な表現を見つけることができないため、ここでは **Fraternity** と英語のままで表記する。 **Fraternity** の改善と再建はフランシスカンに繰り返し求められるテーマであり²、OFM 日本管区は 2007 年に開催された第 11 回管区会議の中で **Fraternity in Mission**（派遣されて宣教する使命を帯びた観想的で巡業する兄弟共同体）を自らの自己理解として確立し、 **Fraternity** を宣教の核に据えた³。

ここで問わなければならないのは、なぜ、フランシスカンは **Fraternity** において存在しなければならず、 **Fraternity** を宣教の核に据えなければならないのかということである。

本宣教論は、この問いに対し、起源にその答えを求めるのではなく、 **Fraternity** の意味の歴史的変遷を辿るのでもなく、現代社会という文脈からその答えを引き出すことを試みるものである。本宣教論は、「関係性の崩壊」を現代世界が抱える最も根源的な問

題として捉え、フランシスカンの宣教が **Fraternity** を通して失われた関係性を回復させるものであることを説明する試みである。

本宣教論を作成するにあたり、レオナルド・ボフ⁴の三位一体論とフランシスコ論の一部を大枠として用いた。ボフの神学は今日にあってはもはや新しいとはいえないかもしれない。主要な著作の多くは日本においては翻訳されておらず、その神学の内実は十全に紹介されてもいない。ボフは自らの考察を、解放の神学を基点として展開しているが、彼の神学は南米における抑圧された民衆の解放という文脈を越えて、現代世界における関係性の崩壊を踏まえその回復を志向するものであり、**Fraternity** を通して展開されるフランシスカンの宣教の到達点を指し示すものと筆者には思われる。

1 現代世界における関係性の崩壊

1981年に刊行された聖フランシスコに関する著作の中で、レオナルド・ボフは、キャピタリズムによって生起し、生産技術、市場、消費主義の興隆と富、所有、権力への渴望とによって作られ地球を網羅するに至ったシステムが構造的な危機を生み出していることを指摘している⁵。彼によれば、このシステムは自己閉鎖的であり、システムを改良すべく立ち現れてくる種々の可能性を統合することを拒絶し、危機を超克する代替を発達させることができない⁶。さらにボフはいう、「この危機は空虚さ、孤独、怖れ、苦悩、目的のない攻撃性、ひとこと言えば、全体的な不満足感という亡霊のような現象として表れ出でる。空虚さは、私たちの

生活と社会を変えるためになし得ることがほとんどない、そして大切なものは何も存在しないという不能感から生まれる。孤独は友情と優しさという視点からみれば自然と他者との接触が欠落しているということの表れであり、そこでは私たち自身を自己と他者との関係性に委ねようとする勇気が欠落している。怖れは一般的に生活、雇用、人類の集合的生存に対する脅威を客観的に感じている結果である。不安は、何をなすべきか、誰を信頼すべきか、何を期待すべきかという問いに答えることができない恐怖にその起源を見いだすことができる。不安が社会全体を覆ってしまうとき、社会全体は自らが脅され、その終末が近づいていると感じる。常態化した攻撃性は、それなくしては社会を築くことも護ることもできない関係性という規範の決壊を示している。それが行き着くところは匿名性と自己 (the Self) すなわち人間であることの価値と聖性の喪失である。これらすべてのことから深刻な二つの結果が引き出される。それは空洞化と日常において織りなされるコミュニケーションの喪失であり、意味深いパーソナルな関係性と自然とのヴァイタルな関係性の消失である。空虚さを孕み、脅されていると思い、不安を抱え、そして慢性的な攻撃性を宿した多くの人間にとって、自然は沈黙と無関心さを保つ死に絶えたものとして立ち現れる。同様に熱情の欠如はエコ・システムの破壊を推し進める。これに付け加えられるのが過剰なまでの不条理であり、それは社会を統合しようとするシステムの限界を示すものである」⁷。フランシスコ論におけるボフの記述に従えば、この危機は、人間に「自己」としての価値を見失わせ、人間の個別化を徹底して推し進め、孤立した人間を無力感、不信感、不満足感で覆い、暴力的衝動を植えつけ、被造界を無機的な存在におとしめ、

自然界を略奪の対象とし、人間と人間との関係性、人間と自然との関係性を破壊するものである。

ボフの神学的考察は南米社会の民衆が体験していた貧困、搾取、抑圧という現実を基に展開されたが、彼が神学者として活動を始めた頃から現在に至るまでの間にキャピタリズムの構造に変化がもたらされ、かつて北（先進国）と南（途上国）との間に存在していた貧困や格差という問題は先進国や新興国を問わず各国内にみられる現象へと変化した⁸。その結果、キャピタリズムに由来するシステムが生み出した危機によってもたらされた諸現象は、貧困や格差とともに、フランシスコ論が発表された 1980 年代よりもグローバル化が進行し、2008 年に起こったリーマンショックに端を発する世界恐慌を経た現在の日本においても生々しく実感されるものとなっている。ボフが指摘しているとおおり、これらの危機が行き着いた先が人間の孤立化すなわち人間と人間とを結ぶ関係性の消失、人間と被造界とを結ぶ関係性の破壊であり、関係性の崩壊は現代世界が直面している根源的問題の一つとなっている。

教皇フランシスコの使徒的勧告『福音の喜び』はこの現状を踏まえて書かれたものである。同勧告の中で教皇は現代世界における経済を「排他性と格差のある経済」と呼び、「現代ではすべてのことが強者が弱者を食い尽くすような競争社会と適者生存の原理のもとにあり」、そこでは単なる搾取や抑圧を越えて人間を廃棄物、余剰物として社会の底辺へではなく、社会の外に追い出す現象が起こっていると指摘している⁹。ここで指摘されているのは人間と社会とを結ぶ関係性の断絶であり、人間の孤立が「孤絶」とまで呼ばれるに至り、「無縁社会」と呼ばれるようになった日本社会

においてもこの現象の一端を垣間見ることはできる。他方、教皇フランシスコは、持てる者の間に「他者を排除する生活様式を維持するために」無関心のグローバリゼーションが広がっていると語り¹⁰、このような人々の間に蔓延している個人主義、自己閉鎖性、自己中心性について度々言及している¹¹。

他者の排除と自己中心化は司牧者、宣教者、奉献生活者の間にも広がっている現象である。教皇フランシスコは奉献生活者や司牧者たちの間にも個人的生活空間への過度な関心がみられ、そこでは靈的生活が「何らかの慰めをもたらさしはしても、他者との出会い、世の中とのかかわり、宣教への情熱を養うこともない、いくばくかの宗教的瞬間に取り違えられて」いると語っている¹²。また、2015年5月に開催されるフランシスコ会総集会に備えて作成された『リネアメンタ』においても、現代世界における経済モデルの要素の幾つかがフランシスコ人たちの生活にも影響を与え、フランシスコ人たちも消費主義のメンタリティに染まり、フランシスコ人たちの間にもブルジョア的な生活様式が広がっていると指摘がなされている¹³。現代世界に蔓延した個人主義、自己中心性、閉鎖性はフランシスコ人個人にも諸管区にも影響を与え、それが **Fraternity** としてあるべきフランシスコ人のアイデンティティを揺るがすものとなっている¹⁴。

人間と人間とを結ぶ関係性の消失、人間と社会とを結ぶ関係性の断絶、人間と被造界とを結ぶ関係性の破壊は現代世界が抱えている根源的な問題であり、それは個としての人間に個人主義、自己中心性、自己閉鎖性をもたらし、宣教者や司牧者はもとよりフランシスコ人たちもまたこの危機に呑み込まれているのである。

2 三位一体と被造界のコムニオンへ

レオナルド・ボフは、現代世界における関係性の崩壊を踏まえ、その超克のために自らの神学的考察を展開した。ボフの試みは、たとえば、その三位一体論の中に明確に読み取ることができる。ボフの三位一体論は、三位一体の関係性の神秘を基盤とするものであり、ペリコレシス（perichoresis／相互内在性）¹⁵、コムニオン（communion／交わり）、インターペニトゥレーション（interpenetration／相互内浸透性）という用語を軸に展開されている¹⁶。

ボフによれば、三位の位格は起源においては同時的であり、コムニオンとインターペニトゥレーションにおいて、すなわちペリコレシスにおいて三位の位格は永遠に共-存在している（co-exist）している¹⁷。三位一体である神はコムニオンの内において他の位格に自らの生命を与え続けている存在である¹⁸。三位一体はそれ自体で閉ざされてしまわず被造界に向かって働きかけ、神の国の完成へと向かうべく世界の変容を促進させ、終わりの時に全被造界は三位一体のペリコレティック（perichoretic／相互内在的）な一致の内に包み込まれる¹⁹。三位の神秘は歴史の内に現存し、人間にコミュニケートし、人間はその神秘に触れることができる²⁰。人間が交わりそのものである三位一体の似姿として造られたということは、人間が他の被造物とのアクティヴなウェブ（web／網目）の内に存在していることを意味している²¹。人間の生とその営みは歴史の内に現存する三位一体と結びついており、人間は共に生き共に三位一体のコムニオンに入るべく招かれている²²。

ボフは、その三位一体論において、関係性そのものである神（ペリコレーシスにおいて一致している三位一体である神）によって造られた人間を関係性の内に生き、関係性を生きることにより三位一体である神のコムニオンに導き入れられ統合されていく存在として描いている。ここでは、関係性が神と神によって創造された人間の本質として理解され、さらには救いへと至る道として示されている。

ボフは 1996 年に発表されたエコロジーを神学的に考察することを試みた著作において、被造界における関係性をより精密に描くことを試みている。この著作の中で、ボフは、関係性を政治、経済、倫理、心理、神秘、過去と未来までもを包摂するより多元的・放射状的なものとして捉え、すべての被造物が広大な関係性の中で自らの相関的自立性を表明しながらも他の被造物とのウェブの内に存在し広大で有機的なリンクを築きあげている様を描いている²³。全被造物が個としての自らを保ちながらも関係性の内に結びつき、この関係性があらゆる境界を越えて被造界の隅々にまで行き渡り、被造界が一つの有機体として存在している。被造界におけるこの関係性を被造界における兄弟姉妹性もしくは被造界における宇宙的兄弟性と呼ぶことができるだろう²⁴。また、全被造物の完全な兄弟姉妹性が実現している宇宙を三位一体の似姿として捉えることができるだろう。

ボフによれば、アシジの聖フランシスコは被造界における宇宙的兄弟性の内に生きることを試みた人物である。もしくは聖フランシスコが生きようとした宇宙において被造界の兄弟姉妹性が実現していた。聖フランシスコは貧しい人々とアイデンティファイし悔悛（penance）の道を歩んだが、この試みの中心にあったのが

貧しさであり、貧しさとは被造界のあらゆる諸事物を自らのあらゆる形態の支配の下におくことなく、諸事物をそれ自体として存在させる係わり方である²⁵。また、ボフは、聖フランシスコが無所有と他者に仕えることに徹したがゆえに、すべての被造物が被造界に受肉したキリストの兄弟であることを、すなわち、すべての被造物の根源的兄弟性を見いだしたと言う²⁶。聖フランシスコの内に、世界に君臨するのではなく、他の被造物と共に同じ家族のなかの兄弟姉妹のように世界にある在り方が示されている。この状態について、ボフは「聖フランシスコを囲んでいた宇宙は無窮の優しさによって包まれ、すべての献身というもっとも親密なフィーリングに満ちていた。彼は他の被造物の心からの愛によって、そこに招じ入れられたかのように感じていた」²⁷と書いている。聖フランシスコは、貧しさ、無所有、他者への奉仕を通して、すべての被造物と完全な水平的な関係の内に身を置き、自らと彼が生きた被造界・宇宙との完全な和解を成し遂げようとしていたのである。

関係性が崩壊している現代世界に対してボフの三位一体論は関係性を神と人間と被造界の本質とみなし、全被造界の三位一体におけるペリコレティックなコムニオンへの一致と統合のうちに救いの完成をみるものである。聖フランシスコの歩んだ道は、関係性の回復、すなわち被造界における宇宙的兄弟性の内に存在し生きる道であり、それは被造界と三位一体である神との統合へと至る道である。

現代世界にあっては人間と人間とを結ぶ関係性が消失し、人間と社会とを結ぶ関係性が断絶され、人間と自然界とを結ぶ関係性が破壊されている。今、世界に求められているのは崩壊してしま

った関係性の回復である。フランシスカンとは神と人々と全被造界との交わりを生きるために召命を受けた存在であり²⁸、フランシスカンのアイデンティティは神と人々と全世界との交わりを生きることの内にあり²⁹。フランシスカンとは崩壊してしまった関係性の回復を、**Fraternity** を通して実現していく存在である。**Fraternity** は、フランシスカンが関係性の回復を求めて生きるその生き方・在り方・かかわり方であり、歩む道であり用いる道具である。この試みと歩みはアシジの聖フランシスコがそのうちに生きることを試みた被造界における宇宙的兄弟性を志向するものであり³⁰、その到達点は被造界の三位一体である神のコムニオンへの完全な統合である。

3 Fraternity in Mission

3.1 Fraternity において「より小さき者」であること

- ・ フランシスカンは **Fraternity** を通して関係性の回復を目指す存在である。
- ・ フランシスカンは **Fraternity** を生きる存在であり³¹、自らの間で営む **Fraternity** をすべての人に及ぼすことを求める存在である³²。

Fraternity はフランシスカン相互の自己犠牲なくして創出されえない³³。あらゆる関係性は、その関係性に招じ入れられるものすべてを活かそうというものであるならば、どのような形態であれ支配や服従を強いるものであってはならず、その関係性の内に

存在しようとするものが互いに他者のための領域を自らの内に作ることによってのみ成立する。すなわち、その関係性において自らの存在と時間を無条件に他者に捧げることによってのみ関係性は成立する。

それ故に、聖フランシスコは兄弟たちに誰もが「より小さき兄弟 (frater minorum)」と呼ばれるべきであると言い、互いに足を洗い合うことを勧め³⁴、兄弟たちにどのようなところにおいても、「より小さき者」としてとどまることを望んだ³⁵。聖フランシスコは、兄弟たちに争うことを禁じ、兄弟たちの間でも他の人々に対しても「私たちはとるに足りない僕です」(ルカ 17:10) と言い謙遜にこたえるよう心がけることを兄弟たちに求め³⁶、兄弟たちの間にあって他の兄弟たちの上に立てられた者には兄弟たちに仕えることを求めた³⁷。

聖フランシスコは兄弟たちに自らを優れた者と考えることを戒めた。「なぜなら、人々は神の御前にあるだけの者であって、それ以上の何ものでもないから」である³⁸。

聖フランシスコの言葉にあるように、**Fraternity** はフランシスカンたちがその関係性の中で互いに自らを「より小さき者」として存在させることによってのみ成立する。それゆえに、会憲もフランシスカンに「より小さくあること (minoritas)」という特権以外の特権を求めることを禁じている³⁹。**Fraternity** を生き、**Fraternity** を他の人々に及ぼすことを求めるフランシスカンは、他のフランシスカンに対しても、他のいかなる人々に対しても、あらゆる関係性において「より小さき者」として存在する。

3.2 「より小さき者」であることによる宣教

フランシスカンにとって、**Fraternity** を生きることと宣教とは一つに結びついている。

会憲は「生活によるあかし、すなわち、神の国を言葉によらずに宣言することは、福音宣教のはじめ (*initium*) であり、第一の方法 (*primus modus*) である」としている⁴⁰。**Fraternity** は「福音への第一にして、優れて明らかなあかし」であり⁴¹、フランシスカンは、**Fraternity** において「より小さき者」として生きるかぎり、キリスト者であることを告白しているのである⁴²。

聖フランシスコは、イスラム教徒や非キリスト教徒のもとへ派遣される兄弟について言及する中で、宣教には二つの方法があると述べている。「ところで、そこへ行く兄弟たちは、二つの方法をもって、彼らの間で霊的に生活することができる。一つの方法は、口論や争いをせず、『神のためにすべての人に従い』(I ペトロ 2・13)、自分はキリスト者だと宣言することである。もう一つの方法は、主の御心にかなうと判断するなら、神の御言葉を宣べ伝えて、〈略〉、洗礼を受けてキリスト者になるようにと、勧めることである」⁴³。ここにみられるように、フランシスカンにとって、生活による宣教は言葉による宣教に先行するものである。

ここで言われている生活、ラテン語の *Vita*、英語の *Life* の意味は日常生活や日常における営みを越えて、生き方、在り方、係わり方をも包摂するものであろう。先述した『勅書によって裁可されていない会則』の中では「すべての人に従うこと」すなわち「より小さき者として生きる」ことが霊的生活と結びつけられている。会憲においても、「生活によるあかし」と「**Fraternity** においてよ

り小さき者として生きる」ことが福音宣教という視点から同じ意味合いをもたせられて語られている。フランシスカンにとっての生活とは **Fraternity** を始めとする関係性の中で「より小さき者」として生き、存在し、他者と係わることを指している。フランシスカンにとっての宣教とは、フランシスカンたちの間で、またどのような人に対しても、その関係性の中で、「より小さき者」として存在し、係わる、その生き方全体である。

3.3 Fraternity における聖霊の現存

福音書はイエスが神によって遣わされた存在であり（ルカ 4・18、ヨハネ 3・34）、聖霊がイエスのもとにとどまり（マルコ 1・10、マタイ 3・16、ルカ 3・22、ルカ 4・14、ルカ 4・18）、聖霊がイエスの宣教活動のイニシアティヴをとっていた（マルコ 1・12、ルカ 4・1、マタイ 4・1）ことを伝えている。このことを受け、教皇フランシスコは、あらゆる福音宣教のイニシアティヴをとるのは神であり、神が聖霊の力によって宣教に駆り立てると語っている⁴⁴。

会憲は、キリストが父である神に派遣されたようにフランシスカンもまた神によって派遣される存在であり、キリストが聖霊の導きのもとにあったようにフランシスカンの宣教も聖霊の導きのもとにあると解している⁴⁵。フランシスカンとは神によって遣わされ、聖霊の働きに身を委ね、イエス・キリストに付き従うものである。

イエスの内に聖霊が現存していたように、フランシスカンにもフランシスカンたちの間にも聖霊を現存させることが求められる。

なぜなら、アシジの聖フランシスコが聖霊の現存を兄弟たちに強く求めていたからである。聖フランシスコは、パウロの言葉「あなた方の体は神から受けた聖霊が宿ってくださる住まいであり、そして、あなた方はもはや自分自身のものではない」(1 コリント 6・19) に基づいて、兄弟たちの体を聖霊が宿る神殿とみなそうとしていた⁴⁶。聖フランシスコ自身が聖霊に生かされる術を知り⁴⁷、兄弟たちに聖霊とその働きを持つことを強く求め⁴⁸、聖霊の働きを消さないようにと呼び掛けていた⁴⁹。

イエスの存在を特徴づけていたものは「神でありながら自分をむなしくして僕の身となり、人間と同じようになった」(フィリピ 2・6-7) へりくだりであり、神以外の者が先生と呼ばれても父と呼ばれてもならない」といった謙遜さである(マタイ 23・8-9)。イエスの内に聖霊が現存していたという時、最初に注目すべきはイエスのへりくだりであり、謙遜さであり、イエス自身がその生き方において体現していた「より小さくあること」である。聖フランシスコは、何か善をなした時、自らへりくだり、他のすべての人より自らを「より小さき者」とみなすなら、その人は聖霊をもっていると言う⁵⁰。へりくだり、謙遜ということを含む「より小さくあること」、すなわち誰に対しても「より小さき者」として存在するということは、その人の内に聖霊の現存を可能たらしめる様態の一つであろう。

イエスは自らについて「仕えられるためではなく仕えるために来た」、「多くの人の贖いとして自分の命を与えるために来た」と語っていた(マタイ 20・28、マルコ 10・45)。イエスは、敵を愛し、自らに対し憎悪を抱く者のために善を行い、呪う者を祝福し、侮辱する者のために祈ることを勧め(ルカ 6・27-29)、持ち物を奪お

うとする者から取り戻そうとしてはならない、求める者には誰にでも与えよと言った（ルカ 6・30）。これらの言葉が指し示しているように、イエスの生と存在は自らを完全に与え尽くすこと、すなわち自己譲渡というかたちを纏っていた。聖フランシスコは、兄弟たちの生活に入ってくることを望む者に、自分のすべてのものを売って、それを貧しい人々に施すことを求めている⁵¹。また、聖フランシスコは、幾つかの福音の言葉を引用し、兄弟たちに、世の中を旅する時に自分の全存在を与えることを求めている⁵²。聖フランシスコは、霊的なものも物質的なものもすべては神に帰するものであり、個人に帰するものではないことを確信していた⁵³。したがって、**Fraternity**の中にあって、「より小さき者」として生きるフランシスカンの生のベクトルは、自らのためには何もとっておかず自らを惜しみなく与え続けること、すなわち自己譲渡にかたちを与えるものとなる。そして、会憲は、現代世界に生きるフランシスカンが、何ものも自分のものとはせず、自分たちに使用の許されたものを他者と分かち合い他者のために使用するということによって、自己譲渡にかたちを与えることが可能であることを示している⁵⁴。

イエスの生においてかたちを纏っていた自己譲渡は、イエスのへりくだりと謙遜と並んで、聖霊が現存していたイエスの存在の形態である。フランシスカンとはイエス・キリストに付き従う存在であり、フランシスカンが **Fraternity** を始めとするあらゆる関係性の中で「より小さき者」として存在することと並んでフランシスカンの生が自己譲渡というかたちを纏うところには、イエスに聖霊が現存していたようにそこにも聖霊は現存する。

フランシスカンの宣教とはあらゆる関係性の中で「より小さき

者」として、自らを惜しみなく与え続ける生き方、在り方、係わり方そのものであり、フランシスカンの宣教のイニシアティブをとるのはフランシスカンの間にもしくはフランシスカンが築く関係性の中に現存している聖霊である。フランシスカンとは **Fraternity** と **Fraternity** に基づくあらゆる関係性を造りあげていくことによって聖霊が現存する場を造りあげていく存在である。フランシスカンの宣教は世界の中に聖霊が現存する場を造り広げていくというダイナミズムそのものである。

3.4 現代世界における境界を越えていく Itinerant⁵⁵

聖フランシスコは『勅書によって裁可された会則』の中で「兄弟たちは、家、土地、その他いかなるものも、何一つとして自分のものにしてはならない。むしろ現世においては、旅人、寄留者として清貧と謙遜のうちに主に仕え、信頼をもって施しを求め、これを恥じてはならない」と語っている⁵⁶。Itinerancy はフランシスカンのアイデンティティの一つであり、ここでは Itinerancy が無所有と結びつけられている。ボフによれば、所有への欲望は人間と人間との関係、神と人間との関係を遮断し、所有物は優しさ、陽気さ、連帯、共感という人間性を培う根を滅ぼすものである⁵⁷。貧しさはあらゆる形態の所有と占有を放棄しようとする試みであり、先述したように諸事物をあらゆる形態の支配の下に置くことなく諸事物をそれ自体として存在させる係わり方であり、そのことにより他者との出会いが可能となっていく⁵⁸。Itinerancy は無所有と貧しさに結びついており、無所有と貧しさ

とが神に創造されたものとしての他者との出会いを可能にするものであるというのであれば、Itinerancy もフランシスカンを他者との出会いへと誘うものである。あらゆる関係性において諸事物を神に創造されたままの事物として眼前に現前させる様態が貧しさであり、無所有であり、Itinerancy である。

会憲において、Itinerancy は他者への奉仕と結びつき⁵⁹、また自分自身と使用が許されているすべてのものを他者のために用いることとも結びついている⁶⁰。すなわち、Itinerancy は現代世界におけるフランシスカンの自己譲渡という生き方、在り方、係わり方そのものとも結びついている。Itinerant であることは自らを与え尽くす「より小さき者」として存在することと同義であり、「より小さき者」と自己譲渡という生き方ゆえにそこに聖霊が現存するというのであれば、Itinerancy もまた聖霊の働きに身をまかせ、聖霊の現存を可能たらしめる様態である。

現代世界を特徴づけている現象の一つにグローバリゼーションがある。現代世界においては大規模な移民や難民の移住により従来定められていた国境は消失しつつある⁶¹。人々の大規模な移動により、かつて宣教の対象とされていた遠隔地に住んでいた異国の人々は現在では異なる言語、慣習、感性をもつ隣人として身近に存在している。彼らに福音を宣べ伝えるために異国の地へ出かけて行く必要はない⁶²。

大規模な人々の移動により国境は消えたが、一つの社会はより変動的なものとなり、より多元、多様、多層なそれへと変貌し、社会の中には新しい境界がもたらされた。その結果、人々は「区分けの厳しい仕切られた社会の中で」生きるようになり、「そのために、差別や排斥が生じ、極端な場合は身体的、心理的、思想的

な暴力が生まれて」いる⁶³。「福音宣教者とは、派遣されているという単純な事実によって絶えず境界（**Border**）を越える人のこと」⁶⁴であり、**Itinerant**であるフランシスカンはこれらの境界を越えていく存在である⁶⁵。もしくはこれらの境界に拘束されない存在である。このことについて『福音の賜物の使者』は具体的に次のように語っている。「私たちは旅をしながら、男女の境界、聖職者と信徒の境界、金持ちと貧乏人の境界、文化と自然の境界、身体と魂の境界、市民と移民の境界、祈りと仕事の境界、修道会と世間の境界、共同体と個人の境界を越えるように緊急に求められています。福音宣教には、これらの境界に穴をあけ、境界の両側からのコミュニケーションができるようにすることも含まれます⁶⁶」

フランシスカンは「より小さき者」として、何ものも自らのものとはせず、自らを与えながら、一つの社会を縦横に切り裂く境界を越えることにより、境界によって引き裂かれていたものを和解へと導く存在である。フランシスカンが一つの社会の中の様々な次元において **Fraternity** を築き、また「より小さき者」として存在することにより崩壊していた関係性を回復していくとき、そこには聖霊が現存する。フランシスカンの **Itinerancy** は、フランシスカンに社会を切り裂いているさまざまな境界を越えさせ、社会の中に存在する幾つもの次元に聖霊が現存する場を造り拓げていくものである。

4 三位一体と Fraternity

関係性が崩壊している世界にあって、フランシスカンは **Fraternity** を通して関係性の回復を実現していく存在である。

フランシスカンが造りあげる **Fraternity** を始めとする関係性は、他の存在者をあらゆる形態の支配や所有の下に置くことを否定し拒絶するものであり、それは他の存在者を神によって創造された被造物それ自体として存在させるものである。そのため、フランシスカンは、**Fraternity** においても **Fraternity** に基づくあらゆる関係性においても、他者に対して「より小さき者」として、他者に自らを与える者として、支配や所有を造り出すあらゆる境界線を越える **Itinerant** として生き、存在し、係わる。あらゆる関係性において「より小さき者」として生きようとするフランシスカンの生き方、在り方、係わり方自体がフランシスカンにとっての宣教であり、それは聖フランシスコがその内に生きようとしていた被造物界における宇宙的兄弟性の内に生きようとする試みである。

フランシスカンは、**Fraternity** を築き、**Fraternity** が直面するさまざまな問題に対して **Fraternity** を礎とする関係性を造りあげることによって応えていく。**Fraternity** を始めとするあらゆる関係性の中で、フランシスカンが自らを与え尽くす「より小さき者」として他者と係わっていく時、フランシスカンのアクションのイニシアティヴをとっているのは聖霊であり、フランシスカンが造りあげる関係性の中には神が現存する。フランシスカンにとっての宣教とは、社会の中を切り裂く数多くの境界を越え、社会の中の様々な次元において、フランシスカンが築く関係性を通して神が現存する場を造りあげていくことに他ならない。フランシスカンは社会における幾つかの次元に築きあげた関係性を互いにリンクさせていく。それは、この世界の中に神が現存する場を広げ、

この世界を神の国へと変容させていく営みである。

ボフによれば、創造とは神のペリコレティックな生命の表現であり、神的生命は自らの外へと向かって拡張し自らと異なる他者を創造し、神はその他者とコミュニケーションし三位一体のコムニオンへと招き入れようとする⁶⁷。ペリコレティックな一致の内にある三位一体である神は、救いの歴史に働きかけ、終わりにおいてすべてはペリコレティックな三位一体である神のコムニオンへと包み込まれる。フランシスカンが生きる **Fraternity** と **Fraternity** に基づくあらゆる関係性は、三位一体の関係性とそのコムニオンを映し出すものであり、ペリコレティックな一致の内にある三位一体である神の似姿である。フランシスカンが **Fraternity** を生き、**Fraternity** を通して関係性を造りその諸関係を互いにリンクさせていく時、それは、救いの歴史に働きかける三位一体の業に協働し、世界を神の国へ変容させ創造を完成させようとする三位一体の業に連動している。フランシスカンの宣教とは、被造界と三位一体である神との完全なコムニオンへと至る道を歩むことであり、その到達点は「神がすべてにおいてすべてになる」（1コリント 15:28）ことの内にある。

フランシスカンにとっての宣教とは、現代世界における **Itinerant** として自らを与え尽くす「より小さき者」として存在することにより、**Fraternity** において被造界における宇宙的兄弟性を実現させることを試み、関係性が崩壊してしまった現代世界の中で関係性の回復を推し進め、幾つもの関係をリンクさせることにより関係性の中に現存する神の場を拡張、この世界を神の国へ変容させていくことに他ならない。

Fraternity in Mission とは、世界に働きかける三位一体である

神の神秘と共に、またそのペリコレティックな一致をフランシスカンが造りあげる関係性の内に映し出ししながら、この世界を神の国へ変容させていく試みであり歩みである。

終わりに

日本においてカトリック教会は衰退期に入り、かなり以前から日本管区もその弱体化が始まっている。フランシスカンの高齢化と召命の減少が進み、自力で生活することが困難になったフランシスカンが増える一方で、実働できるフランシスカンの数は減りつつある。フランシスカンが長い間担当してきた地方では、主日のミサ出席者数が10人を割り、財政的にも近い将来存続出来なくなる小教区が増えてきている。フランシスカンが設立した学校法人、社会福祉法人の下にある諸園、諸施設では後継者を見つけることが困難となり、カトリックのアイデンティティを保つことが難しくなっている。

このような窮状にあっても、フランシスカンの多くは、旧き良き時代の状態が保たれているという錯覚から離れることが出来ず、現状を認識することを拒み続けてきた。それは、教皇フランシスコや2015年総集会の『リネアメンタ』が指摘するように、人間の個別化が徹底的に進行した現代世界の中で司牧者や奉獻生活者すらも陥った自己閉鎖的にして自己中心的な個人主義にフランシスカンが染まっていたことと無関係ではなかっただろう。

このような窮状に対し、日本管区は先述した通り2007年に開催された第11回管区会義でフランシスカンの自己理解が

Fraternity in Missionであることを確認し、フランシスカン同士の兄弟的関係性を見直し、フランシスカンの生活形態を独居型のそれから共住のそれへと移行させてきた。これは、フランシスカンの間にも根を降ろしていた自己中心性や個人主義を乗り越えようとする日本管区の答えであった。この流れに添って、日本管区は、人的枯渇を踏まえた上で日本管区の将来像を描き、宣教の拠点となる修道院を選択し、介護を必要とするフランシスカンと共住生活を営む共同体を設け、広域を担当している共同体においては共同宣教司牧体制づくりを推し進めることを課題とし、**Fraternity in Mission**にかたちを与えようとしてきた。

Fraternity in Missionとは **Fraternity** と **Fraternity** に基づく関係性を造り広げていく宣教であり、その基点となるのは、現時点においては、介護を必要とするフランシスカンと共住生活を営む共同体の形成と広域を担当している共同体における共同宣教司牧体制づくりの推進である。介護、小教区司牧体制の改革、諸施設への対応という事態にフランシスカンの多くは十全な経験をもたず、基本的には無知、無力である。この事態にフランシスカンは個としての力によってではなく、フランシスカン同士が係わり合うことによって、つまり **Fraternity** を造りあげることによって応えようとしている。とりわけ介護と共同宣教司牧体制の構築に関しては、フランシスカンに協力する信徒、修道者、専門家等を必要とし、彼らとチームを作ることによって対応しようとしている。これは『会憲』第 87 条 1 項に示されているように、自らの間で営む **Fraternity** をすべての人に及ぼすことに他ならない。

フランシスカンが日本のカトリック教会と日本管区が直面している危機に向かい合い、それまで自らを個に留めていた境界を

Itinerant として越え出て、自らの無力さを認め、謙遜に助けを仰ぎながら、**Fraternity** と **Fraternity** に基づくチームを造り、聖霊の働きに身を委ねながらその危機を乗り越えていこうとするとき、フランシスカンが造りあげていく関係性の中には神が現存している。これらの試みの中でフランシスカンが造りあげていく幾つもの関係性（チーム）が互いにリンクされていくとき、それは地上的現実が神の国へと変容されていくプロセスへ収斂されていくものとなるだろう。

参考文献 (本文中の引用には略号を用いる)

- ・ アシジの聖フランシスコ『勅書によって裁可された会則』(RB)。 (『アシジの聖フランシスコの小品集』 庄司篤訳、聖母の騎士社、1988年。以下聖フランシスコの書き物からの引用については同『小品集』から)
- ・ アシジの聖フランシスコ『勅書によって裁可されていない会則』(RNB)。
- ・ アシジの聖フランシスコ『遺言』(Test)。
- ・ アシジの聖フランシスコ『訓戒の言葉』(Adm)。
- ・ 『小さき兄弟会 会憲』2010年 日本聖殉教者管区(CCGG)。
- ・ 『アシジ総集会総括文書 2009年 福音の賜物の使者』(BGG)。
- ・ 『2015年総集会の議題準備文書 現代において兄弟であり、より小さき者であること』(Lineamenta)。
- ・ 教皇フランシスコ『使徒的勧告 福音の喜び』カトリック中央協議会、2014年(EG)。
- ・ Boff, Leonardo. *Saint Francis A Model for Human Liberation*, tr. by John W. Diercsmeier, New York, 1982, originally 1981 in Portuguese(SF).
- ・ Ibid., *Trinity and Society*, tr.by Paul Burns, Maryknoll, NewYork,1988,originally 1987 in Portuguese(TS).
- ・ Ibid. *Ecology & Liberation A New Paradigm*, tr. by John Cumming, New York, 1995, originally 1993 in Portuguese(EL).

註

-
- ¹ Cf. RB 8:1,12:3, RNB5:4,18:2,19:2, Test27:33, CCGG1:1 フランシスコが **Fraternitas** という言葉を使用した重要性は、13世紀のフランシスコ会の史料全体の中で、「フラテルニタス」がわずかに 11 回しか使用されていないが、フランシスコの著作に 10 回（残りはチェラノのトマス『幸いなるフランシスコの伝記』）使用されているということから、つまり、フランシスコに固有の表現であることから明らかである。そして、そのいずれにおいても兄弟たちの集団に言及されている。また、**Fraternitas** は当時修道生活を示した“**religio**”や“**ordo**”と同義語ではないことに注目する必要がある。Cf. Théophile Desbonnets, *De l'intuition à l'institution*, Editions franciscains, Paris, 1983. Pp. 70-71, 78.
- ² Cf. *Lineamenta* II. 1 .B. 1st paragraph.
- ³ "Contemplative and itinerant Fraternity-in-Mission"（派遣されて宣教する使命を帯びた観想的で巡業する兄弟共同体）。2001年、メキシコで開かれたOFM総評議会総括文書「**Fraternity-in-Mission in a Changing World**」の中でフランシスコ会のアイデンティティ表現として出てきた定型表現。
- ⁴ Leonardo Boff(1934~) ブラジル、サンタ・カタリーナ州コンコルディアで生まれる。1964年12月15日にフランシスコ会の司祭として叙階される。1965年から1970年にかけてカール・ラーナーに師事し、1972年論文『世界経験の地平における sacramentとしての教会 (Die Kirche als Sacrament im Horizont der Welterfahrung)』で博士号を取得。1970年初頭から解放の神学を基盤として被抑圧者が体験している貧困、搾取という視点から神学的考察を展開するが、1981年『教会 カリスマと権力 (Church: Charism and Power)』を発表し、同著作をめぐって1984年に教理聖省の調査を受ける。1992年司祭職を離れ、その後リオデジャネイロ大学で倫理学を教える。主要著書に『**Jesus Christ Liberator**』(1972年), 『**Trinity and Society**』(1986年)がある。尚、原書はポルトガル語であるが本論考では英訳によっている。
- ⁵ SF, p.4-5.

⁶ *ibid.*, p.4-5.

⁷ *ibid.* p.5.

⁸水野和夫によれば、1970年代前半、キャピタリズムにとっての必須条件「地理的・物理的空間」の拡大が困難な状況を迎えた（正確には1974年に先進国の国際利子率（利子率＝利潤率）が2%を下回る、すなわち既存の「地理的・物理的空間」に投資しても利益が産み出せないという局面を迎える）。この状況にアメリカは「電子・金融空間（ITと金融自由化が結合してつくられる空間のこと）」を作ることに対応しようとした。このことにより資本が瞬時にして国境を越える体制が作りだされた。1980年代半ばから金融業への利益集中が進み、「電子・金融空間」がアメリカの利潤と所得を産み出す中心的場となり、さらに1995年には国際資本が国境を越えることが統計上明らかになった。つまり、世界中のマネーがアメリカのウォール街のコントロール下に入り、「電子・金融空間」が国境を越えて一つとなり、アメリカは金融帝国となった。キャピタリズムは中心と中心が資本を投資し利潤を吸い上げる周辺とから構成される。20世紀まで中心は北（先進国）であり周辺は南（途上国）だったが、21世紀になって「中心」はアメリカのウォール街となり周辺は各国の中間層となった。2008年「電子・金融空間」で無理な膨張（高いレバレッジや欠陥金融派生商品）をさせた結果、それが破裂してリーマン・ショックが起り、世界経済が大恐慌に陥る。その結果、かつては南北間にみられていた貧困や格差が先進国や新興国も含む一国内に生じるようになった。水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書、2014年）25-30ページ、56-60ページ参照。

⁹ EG, 53.

¹⁰ *ibid.*, 54.

¹¹ *ibid.*, 2, 8.

¹² *ibid.*, 78.

¹³ Cf. *Lineamenta I .A. 5th paragraph.*

¹⁴ Cf. *Lineamenta I .A. 10th paragraph.*

¹⁵ペリコレシスについてボフは次のように説明している。ペリコレシスは三位一体における一致、神の本質（nature）の一致を表すために用いられる。また、イエスにおける人間性のエッセ

ンスを要約するためにも用いられる。新約聖書においては、ヨハネ 10:30、ヨハネ 10:38、ヨハネ 17:21 にイエスにおける父である神との親密な一致についての自己意識がみられる。キリスト教の伝承は従属論 (Arianism)、様態論(modalism)、三神論 (tritheism) と闘いながら常に三位の位格の同本質性 (consubstantiality) を強調してきた。フィレンツェ公会議 (1439-1445 年) は、この伝統を、父は完全に子と聖霊の内におり、子は完全に父と聖霊の内におり、聖霊は完全に父と子の内にいる (DS1331) と宣言した。神学は一つの位格への他の位格による相互内浸透性 (interpenetration) を表現するためにギリシア語の perichoresis を用いた。ペリコレーシスを最初に三位一体論に採り入れたのはダマスコのヨハネ(657?-749 年)であり、後にフランスカン学派のボナヴェントゥラ (1217/21-1274 年)、ドゥンス・スコトス(1265?-1308 年)、ウィリアム・オッカム (1285?-1349 年) らによって採り入れられその意味が深化させられた。ギリシア語のペリコレーシスはラテン語では circuminsessio と circumnessio というふたつの言葉に翻訳された。前者は一つの存在者が他の存在者の内に存在しているという静的状態を意味し、後者は一つの位格の他の位格との動的な相互内浸透性 (interpenetration) と相互遍在 (interweaving) を意味する。ペリコレーシスが三位一体論において主要な位置を占めるようになったのは比較的最近のことである。より開かれた交わり、平等性、差異に対する敬意が実現している社会への切望がペリコレーシを注視させるに至った。TS, p134-136 参照。

¹⁶ TS, p123.

¹⁷ *ibid.*, p142.

¹⁸三位一体のコミュニオンにおける生命の横溢と流出のダイナミズムについてボフは次のように述べている。神は永遠の生命であり、生ける存在であり、神の内において生命は横溢し、奔出し、神は自己を伝えるプロセスの内において存在している。三位の位格は永遠の生命の豊穡さと共に、互いに自らを与え続けている。三位の位格の各々の特質は、他者のために、他者を通して、他者と共に、他者の内にとということである。三位一体の自己実現のプロセスは、自らの生命を他の位格と分かちあう永遠のコミュニオンのダイナミズムからなる。TS, p127-128 参照。

¹⁹三位一体の世界と歴史への働きかけについてボフは次のように説明している。三位一体的一致とはペリコレーシスとコムニオンのそれであり、それは救いの歴史にも現れている。聖霊と復活したキリストがすべての被造物の上に働き、世界の変容を促進し、終末における神の国の完成に向かおうとする父の計画を推進させる。終わりにおいて三位一体のペリコレティックな一致の内にすべての人間と被造界とが包み込まれる。かくして神が「すべてにおいてすべてとなる」(1 コリント 15:28)。全被造界が三位一体に統合され、包み込まれる時、三位の位格は一つとなり、完全なコムニオンとなる。TS, p147-148 参照。

²⁰三位一体の神秘は歴史の進展と社会の発展の中に現存しているとボフは言う。ボフによれば、歴史とは未来に顕れる三位一体のステージであり、今はまだ影の内にしかないが、それは時の終わりに終わりのない祝祭として顕れるものである。三位一体の神秘は幾とおりの異なる仕方で歴史の内に現存している。宇宙はこの神秘を懐胎しており、人はその神秘に触れることができる。TS, p223-226 参照。

また、ボフは、三位一体のコムニオンは現在人々の間で起っている出来事であるとも言う。ボフによれば、人間が地上においていかなるかたちであれ交わりを体験する時、三位一体は自らをコミュニケーションし、そこでは三位一体のコムニオンが体験されているのである。TS, p163 参照。

²¹ボフは人々を三位一体の像もしくは似姿として理解しようとしている。ボフによれば、人間が三位一体である神の似姿であるということは、彼らが他者との開かれた関係性の内に存在していることを意味する。三位一体論的な視点からすると、人々が神の位格の像もしくは似姿であるということは、彼らが関係性の絶え間ないアクティヴなウェブとして行為する存在者であるということの意味する。TS, p148-149 参照。

²²ボフによれば、三位一体は人間各々の生、日常の体験、世界の受難を担うこと、人間という存在者の悲劇、社会的公正さを求める闘争、よりよい社会を作ろうとする努力と結びついている。人間は共に生き、三位一体のコムニオンに入るために招かれている。TS, p157-158 参照。

²³エコロジーは、ドイツ人の生物学者 Ernst Haeckel(1834-1919)

による造語で、ふたつのギリシア語 *oikos* と *logos* から成る。**Haeckel** の定義によれば、エコロジーは「生ける有機体(動植物)とその環境の相互依存と相互行為の研究」である。しかし、ボフは、エコロジーという言葉が今日ではより広い領域を対象として使われていることを指摘し、エコロジーを自然界のみならず社会的次元・文化的次元をも含み過去と未来とも係わりをもつ全被造物間の関係性、相互行為、対話として捉えようとする。ボフによれば、すべてのものはすべてを包摂する関係性のウェブの内に共存している。同時にすべての被造物は、それ自らの相関的自律性を表明し、所有している。すべての被造物は広大な宇宙的チェーン(鎖)の内に一つのリンクを築きあげている。ここにみられるボフの視点は全体論的(*holistic*)なものである。EL, p9-12 参照。

- ²⁴ボフは、三位一体論の中の神の普遍的父性についての説明を試みる箇所、普遍的兄弟姉妹性について次のように述べている。父は子をもうけた愛と同じ愛をもって、子において、子によって、子と共に、子のために、他のすべての存在に起源を与える。したがって、すべての存在者は父と子の像であり似姿である。すべての存在者が唯一もうけられた子の特質 (*the sonship of the only-begotten Son*) を分かち合っている。すべての存在者が子において、また子の特質を分かち合うことによって、兄弟であり、姉妹である。人間は子(キリスト)において息子であり娘であり、それゆえに人間はみな兄弟姉妹である。子(キリスト)における普遍的娘-息子性 (*universal daughter-and sonship*) は兄弟姉妹からなる社会の基盤である。それは父との交わりにおける唯一もうけられた子に結ばれた社会である。TS, p167-170 参照。

ボフの著作において、普遍的娘-子性、普遍的兄弟姉妹性、被造物の兄弟姉妹性、被造物の宇宙的兄弟性という言葉は同義であり、本宣教論においても同じ意味をもつ言葉として使用している。

- ²⁵ボフは貧しさと聖フランシスコが生きようとしていた宇宙的兄弟性について次のように関連づけている。聖フランシスコは貧しい人々とアイデンティファイし、悔悛の道のりを歩み、痛ましいまでに内的浄化を極めた。これらの営みの中心にあったのは貧しさである。貧しさは何ももたないことの内にあるのではな

い。貧しさとは個人が他の諸事物を自らのあらゆる形態の支配の下に置くことなく、諸事物をそれ自体として存在させる係わり方である。聖フランシスコにとり、それは自らを物質的に貧しい者の位置に置くことによって可能となったのである。貧しさがより根源的なものになっていくと個はより現実へと近づいていき、すべての事物との交わりが可能になっていく。聖フランシスコにおいて実現していた宇宙的兄弟性は聖フランシスコが貧しい者として生きた道の帰結である。SF, p39 参照。

²⁶ TS, p167-170 の他に、フランシスコ論の中でもボフは聖フランシスコが見いだした宇宙的兄弟性の起源を受肉したキリストに求め、次のように説明している。聖フランシスコは無所有と他者に仕えることに徹し、それゆえにすべての存在の根源的兄弟性を発見した。神は父であることをやめないが、父は唯一の子を有し、この子を父の実在的像であり、父の唯一の代理者である。子は人間となり、神の子らの中に入り、兄弟たちの中の偉大な兄弟となった。聖フランシスコは兄弟としてのキリストを体験したのである。すべてのものが、彼らが被造界のただ中にいる子において兄弟であるという点において、神を表しているのである。キリストによる代理性は何ものによっても専有されてはならず、それはコミュニティの中で生きられるものでなければならず、また兄弟たちの中で生きられるものでなければならない。それゆえに聖フランシスコは、すべての者が区別なくより小さき兄弟となり、互いに足を洗い合うことを命じたのである (RNB6・3-4)。SF, p117 参照。ボフによれば、聖フランシスコは、彼が見いだした宇宙的兄弟性を彼の兄弟たちの間で体現しようとしていたのである。

²⁷ SF, p34-35.

²⁸ Cf. Lineamenta II.2.B.1st paragraph.

²⁹ Cf. Lineamenta II.1.B.4th paragraph.

³⁰ たとえば、2014年5月にローマで開催された海外宣教委員会と福音宣教事務局のための第1回国際会議 (First International Congress for Mission and Evangelization) の中で総長マイケル・ペリー (Michael Perry) は「フランシスカンとは世界に平和をもたらす存在であり、フランシスカンにそれをさせるのは悔悛 (penance) である。悔悛とはキリストになる道を歩む生で

あり、それはすべての被造物との宇宙的兄弟性すなわち Fraternity へと導く」と語っている。

31 CCGG1:1.

32 CCGG87:1.

33 Cf. Lineamenta II.1.B.1st paragraph.

34 RNB6:4.

35 RNB7:1-2.

36 RNB11:3.

37 Adm4:1.

38 Adm19:1-2.

39 CCGG91.

40 CCGG89:1.

41 CCGG87:2 ここでは Fraternity(ラテン語では Fraternitas)ではなく fraternal fellowship(ラテン語の *communio fraterna* の英語訳)という言葉が用いられている。

42 CCGG89:1.

43 RNB16:5-7.

44 EG, 12.

45 CCGG83:1.

46 RNB12:6.

47 Adm7:1-4.

48 RB10:8-10.

49 RB5:1-2.

50 Adm12:1-3.

51 RNB2:4-5, RB2:5.

52 RNB14:4-6.

53 RNB17:18, Lineamenta III.2.B. 1st paragraph.

54 CCGG72:1,3, 87, Lineamenta III.2.B. 4th paragraph.

55 Itinerant は巡業者、巡回者を意味する英語だが、適切な日本語訳を見いだすことができなかつたため英語のまま *itinerant* と表記する。同様に巡業性、巡回性を意味する *itinerancy* についても適切な日本語訳を見いだすことができなかつたため英語のまま表記する。

56 RB6:1-3.

57 SF, p72.

58 *ibid.*, p72.

59 CCGG64, 72:1

60 CCGG72:1,3.

61 Cf. BGG23.

62 2014年5月にローマで開催された海外宣教委員会と福音宣教事務局のための第1回国際会議（First International Congress for Mission and Evangelization）の中で総長マイケル・ペリー（Michael Perry）はそのように述べている。

63 BGG22.

64 *ibid.*, 22.

65 *ibid.*, 22.

66 *ibid.*, 22.

67 TS, p175.

以下のアドレスから「宣教基礎論」のファイルをダウンロード出来ます。

1) PDF ファイル (A4 版 印刷&閲覧用)

<http://www.ofm-or.jp/doc/EconomyOfTrinity&FraternityInMission2015.pdf>

2) 電子書籍用ファイル

<http://www.ofm-or.jp/doc/EconomyOfTrinity&FraternityInMission2015.epub>

<http://www.ofm-or.jp/doc/EconomyOfTrinity&FraternityInMission2015.mobi>

フランシスコ会日本管区宣教基礎論
フランシスコ会福音宣教事務局
106-0032
東京都港区六本木 4-2-39
聖ヨゼフ修道院